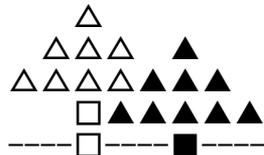


2008/3/28

北海道立林業試験場メールマガジン



『北の森の達人』

Vol.15 第15号

読者の皆様へ

北海道立林業試験場メールマガジン『北の森の達人』は、北海道の森林・林業・身近なみどりに関わる情報を皆様に直接お届けするメールマガジンです。



目次

Table with 2 columns: Article Title and Page/Author. Includes '刊行物ダイジェスト', 'ホームページの紹介', '森とみどりのQ&Aで解決!', '今日の達人のささやき'.



刊行物ダイジェスト1 光珠内季報No.149 (2008.2発行)

◇樹冠長・枝下高を指標としたウダイカンバ大径木の生産技術

(林業経営部 大野泰之ほか)

樹冠長・枝下高を指標としたウダイカンバ大径材の生産技術を提示するため、平均樹冠長と平均胸高直径との関係を解析しました。樹冠長が大きい個体ほど径級も大きく、枝下高が低いことが明らかになりました。この結果をもとに、樹冠長・枝下高を指標として「間伐遅れ」となる林齢を仕立て目標とする径級・地位指数別に提示しました。

◇リモートセンシング技術を利用した日高地方厚別川流域の山腹崩壊把握

(森林情報室 菅野正人ほか)

2003年8月の台風10号の大雨による森林被害が発生した厚別川流域を対象に、空中写真や衛星画像を利用したリモートセンシング技術による山腹崩壊地の把握を試みました。厚別川流域の崩壊地面積は396haで森林面積の1.7%だったこと、山腹崩壊によって流出した材積は57,000m3だったことなどがわかりました。

◇集材路が斜面崩壊に及ぼす影響

(森林環境部 佐藤 創)

2003年台風10号による斜面崩壊に及ぼす集材路の影響を日高地方の厚別川上流で調べました。集材路延長が長くなると、個々の崩壊地の面積が大きくなり、結果として崩壊面積率が高くなることがわかりました。

◇エゾシカは多雪地でどのように越冬しているのか？

(森林保護部 南野一博)

多雪地に生息するエゾシカの冬期間の分布と食性を調査しました。エゾシカは、積雪の増加した期間、深雪を回避するためにトドマツ人工林を利用し、狭い範囲に集中していました。食性は、樹皮や枝などの栄養価の低い食物に依存していました。

<-刊行物詳細情報->

http://www.fri.hro.or.jp/kanko/kiho/kihoh19.htm

刊行物ダイジェスト2 グリーントピックス No.38 (2008.2発行)

◇郷土樹種の種子貯蔵

地域住民による自然再生活動などの高まりにともない、多様な郷土樹種による森づくりが全国各地で行われるようになり、使用する苗木をつくるためにまず種子(タネ)が必要になりますが、できれば現場の環境に適した地元の種子を利用すべきです。広い北海道では同じ樹種でも積雪や寒風に対する耐性などに産地間差がある場合もあるからです。しかし、樹種によっては実に豊凶があるため、同じ地域で毎年種子が採れるとは限りません。そこで、河畔に生える広葉樹を中心に6樹種の種子を採取し、室内で自然乾燥した後、冷蔵庫で貯蔵を開始しました。

◇外来種ニセアカシアの分布を把握する

街路樹や蜂蜜等でなじみ深いニセアカシアですが、実は元々は北海道に自生しない、北アメリカ原産の外来植物です。河畔や森林で分布域を広げており、在来の生態系を脅かす存在として問題視されています。外来種問題を考える上では、分布域の把握が重要ですが、ニセアカシアの分布域をくまなく現地調査するのは大変です。このため、開業

が遅いニセアカシアの性質を利用した人工衛星データの解析と、現地踏査を組み合わせることにより、2002年現在の美唄市周辺100km²のニセアカシアの分布を把握しました。

◇ヨーロッパトウヒ人工林のアトロペリス胴枯病

アトロペリス胴枯病は盤菌類の一種によって引き起こされる針葉樹の病気です。日本国内では北海道でのみ知られており、トウヒ属に発生します。1966年に“トウヒのがんしゅ病(仮称)”として被害事例が初めて紹介され、これまでに32～48年生ヨーロッパトウヒ人工林、エゾマツ天然木、24～50年生のエゾマツ造林木、アカエゾマツ天然木などでの被害が報告されました。エゾマツなど針葉樹天然木が残る山間部に造成したヨーロッパトウヒ造林地では本病に対する警戒が必要です。被害木を間伐する際には伐倒木を林外に持ち出すのが望ましく、また、被害率が高い林分は早めに収穫し利用するのがよいでしょう。

◇森林とみどりの担い手養成セミナー

林業試験場では、林業やみどり環境に携わる技術者や自然教育活動の指導者を志す方々のため、「森林とみどりの担い手養成セミナー」を毎年開催しています。詳しい講座内容を知りたい方、受講を希望される方は林業試験場の本場、または各支場までお問い合わせ下さい。

<-刊行物詳細情報->

<http://www.fri.hro.or.jp/kanko/topics/topicsh16.htm>

■刊行物ダイジェスト3・・・光珠内季報 No. 148号(2007.10発行)

◇林業試験場が平成19年度に取り組む試験研究のあらまし (企画課)

◇絶滅のおそれのある樹木の実生による増殖 (林業経営部 八坂通泰)

絶滅のおそれのある樹木7樹種を対象として、自生地外での保全対策を効果的に実施するため、発芽特性、実生苗の生育特性、病害虫の発生などについて検討しました。その結果、いずれの樹種でも実生による増殖が可能でしたが、7樹種中4樹種が2年発芽種子であることや、一定数の苗木を増殖するために採取すべき果実数、定植までに要する年数、病害の発生状況など各樹種の実生増殖における注意点が明らかになりました。

◇道路法面緑化における在来緑化植物の活用ーササにみる在来緑化植物の供給体制の構築 (緑化樹センター 錦織正智)

生物多様性の保全の観点から、道路法面へ施す緑化には土壌浸食などを抑える災害防止機能のみならず、自然保護や景観形成などの機能も求められるようになってきました。自然環境と調和を実現する緑化技術の実現には自生植物を緑化素材として生産供給するシステムを構築する必要があります。このことについてササ苗の生産を例に紹介します。

<-刊行物詳細情報->

<http://www.fri.hro.or.jp/kanko/kiho/kihoh19.htm>

■刊行物ダイジェスト4・・・グリーントピックス No. 37(2007.9発行)

◇流木ダムが土砂を貯める

河畔林から河道に供給される倒流木(とうりゅうぼく)には、溪流魚の生息場をつくるなど生き物にとって大切な機能がありますが、より上流域では、土砂を貯め河床を安定させる治山効果を発揮しています。この効果が、河畔林の有無によって大きく異なることがわかりました。

◇斜面崩壊危険度マップをつくる

地球規模での気候変動により、豪雨による斜面崩壊が増加することが心配されています。斜面崩壊がどの場所で起きやすいか?を示す危険度マップがあれば、対策施設を整備したり、土地利用計画や避難計画を立てたりする際の参考にすることができ、災害を軽減することにつながります。2003年8月の台風10号によって、日高町門別本町と新冠町を流れる厚別川流域において多発した斜面崩壊が、地形ファクターや地質が崩壊発生に大きく関わっており、林相の違いはあまり影響を与えていないことがわかりました。この結果を用いて崩壊危険度マップを作成しました。

◇高性能林業機械の作業難易度マップをつくりました

高性能林業機械の能力を生かした施業計画の立案を支援するため、高性能林業機械による林内での機械作業の難易度を3段階で表現したマップを作成しました。

高性能林業機械の作業能率は、“森林から道路までの距離”と“傾斜”に大きく左右されます。この2つの因子をもとに、対象となる森林が機械作業に適しているかどうかを小班ごとに判断し、「適している」「普通である」「検討を要する」の3段階で示しました。マップは各森づくりセンターの民有林GIS上で表示することができます。

◇めん羊放牧で山づくり

めん羊は中型で扱いやすく、肉から毛、乳など様々な利用できる有用な家畜です。牛や馬などと比べると食草に対する嗜好性の幅が広く、野草を根元からきれいに食べます。こうしためん羊の性質を利用して、針葉樹の単相林を広葉樹が混ざった多様な混交林へと誘導する試験を北海道立畜産試験場中小家畜飼養科と共同で行いました。

<-刊行物詳細情報->

<http://www.fri.hro.or.jp/kanko/topics/topicsh16.htm>

■刊行物ダイジェスト5・・・光珠内季報 No. 147(2007.7発行)

◇定性間伐と列状間伐におけるハーベスタの生産性の違い

(林業経営部 中川昌彦)

定性間伐と列状間伐におけるハーベスタの生産性について、伐倒対象木の平均単材積に基づいて推測する方法を検討しました。定性間伐の場合は1日1台当たりの伐倒対象木の平均単材積の200倍、列状間伐の場合は284倍となりました。間伐においてハーベスタを導入して素材生産のコストを低減するためには、定性間伐よりも列状間伐が有効であると考えられます。

◇収量-密度図で収穫予測をしようーカラマツを対象とした新しい施業体系ー

(道東支場 滝谷美香ほか)

林業試験場ではこの度、長伐期施業に対応した「カラマツ人工林施業の手引き」を出版しました。本書中の収穫予測は収量-密度図の理論に基づき計算されています。しかし一般的に収量-密度図を利用した収穫予測は利用される機会が少なかったため、手引きの発行を機会に改めて収量-密度図の利用方法を説明します。

◇トドマツ精英樹の通信簿(トドマツ精英樹特性表Ver. 2 材質特性追加版)

(林業経営部 来田和人)

これまで成長形質について作成されていたトドマツ精英樹の特性表に材質の評価を加えて特性表を改定しました。このことで造林成績だけでなく、材質面で改良された採種園種苗の提供が可能となりました。今後、採種園の改良を行なう時の選木基準としてこの特性表が用いられます。

<-刊行物詳細情報->

<http://www.fri.hro.or.jp/kanko/kiho/kihoh19.htm>

■刊行物ダイジェスト6・・・平成18年度北海道林業試験場年報(2007.7発行)

Web版平成18年度北海道林業試験場年報を発行しました。

◇平成18年度試験研究課題

◇平成18年度試験研究の概要

◆企画指導部(1課題) ◆林業経営部(8課題) ◆森林環境部(4課題)

◆森林保護部(3課題) ◆緑化樹センター(3課題) ◆支場(5課題)

◆外部との共同研究(9課題)

◇研究発表業績

◇技術指導並びに普及

◇物量の分析及び鑑定

◇特許・品種登録

◇林業専門技術員の活動実績

◇総務

<-刊行物詳細情報->

<http://www.fri.hro.or.jp/kanko/nempo.htm>

■刊行物ダイジェスト7・・・HPの紹介

◇セミナーのページを更新しました

平成20年度 森林とみどりの担い手養成セミナー

■森とみどりのQ&Aで解決!・・・特集 緑化樹の維持管理

【Q1】生垣の管理法は?

【A1】生垣の管理の仕方、他の庭木と異なる点として剪定と冬囲いがあげられます。剪定をしないとどんどん大きくなり枝も広がってしまいます。そのため、年2回程度の剪定を行います。時期は1回目は6月中旬頃で、2回目を行う場合は7月下旬頃が良いでしょう。その際、生垣の両端に何本か糸を張り、そこからはみ出す部分を刈り込むと簡単に行えます。また、積雪地域では、生垣の上に雪が積もり、その重さでつぶれることがあります。そのため、かなり丈夫な冬囲いが必要となります。

【Q2】サクラを植栽する場合の留意点を知りたい。

【A2】まず、樹種の選定を誤らないようにし、その地域で育つ種類を選ぶことです。また、土が軟らかく、水はけの良い所を好みます。水が溜まりやすい場所は避けて下さい。

根はあまり深くまで入りませんが、横に大きく広がりますので、根が伸びることのできる場所を確保して下さい。また、苗木は枝や根がしっかりと張り、元気の良いものを選びます。伸びの少ないもの、枯れ枝のあるものなどは避けて下さい。植栽時期は葉が出る前の春先に植えて下さい。

【Q3】大きな樹木を移植するときの留意点は？

【A3】樹木を移植することは、木にとってはとても大変なことです。2m程度の苗木でも移植時に失われる細根の量は約90%にも達します。大きな木では移植時に残る細根の量はきわめて少ないと言えます。そのため、大きな木では細根を出させる根回しを行う（時期は春先が良い）こと、できるだけ大きな根鉢（樹木の根と土が一体化したもの）を付けること、春芽が吹く前に移植すること、移植した場所の土が軟らかく水はけが良いことなどが注意点としてあげられます。また、移植時には肥料のやりすぎは良くありません。2ヶ月ぐらいしてから、少しずつ与えて下さい。

<-森とみどりのQ&A詳細情報->

<http://www.fri.hro.or.jp/qanda/search.asp>

■今日の達人のささやき・・・緑化樹センター管理技術科長 野中 俊一

最近、街路樹の傷や腐朽の状況、原因などについて調査をしています。全道で65路線を調査したところ、街路樹には平均して1本当たり1個以上の傷や腐れなどがありました。その原因には枝の剪定跡、支柱によるこすれなどのほか、除排雪による傷、積雪による枝抜け・枝折れのように、寒冷積雪な北海道ならではのものも多くありました。これらの調査結果を基に北海道に適した緑化樹の維持管理技術の確立に取り組んでいるところです。

////////////////////////////////////

■発行・編集

北海道立林業試験場

〒079-0198 北海道美唄市光珠内町東山

■問い合わせ担当

企画指導部森林情報室情報管理科

メールマガジン専用電子メール mmgadmin@hfri.pref.hokkaido.jp

■記事の取り扱い

北海道立林業試験場メールマガジンに掲載された記事を転載することは
ご遠慮ください。

////////////////////////////////////